

十月一日

朝の陽光が清冽である。六時過起床。昨日は奈良の渡辺豊和さんから電話をいただき、七日に私の展覧会を見に上京するとの事であった。嬉しいが、チョツと気味も悪い。渡辺豊和さんが何らかの反応を示す要因が展覧会の知らせにあったという事だから。

「荒地地に満ちるものたち」と題した、ときの忘れものの展覧会は私自身にとって大変興味深いものであった。自分で自分の展覧会を興味深いと言つのもおかしなものだが、実はこの展覧会は自分の中の未知を探ろうとする私の実験でもあった。六〇才になつて、友人、知人の幾たりかを失つた。体力も明らかに落ちた。このうえ、気力、想像力の類までも落ちていくようなら、もう先はあんまり明るくはない。それで一度本格的な自己検診をしてみようと考えたのだつた。不幸中の幸いがあつて、現実の身体の方は病院で検査し尽くした。幾つかの難点が発見されたが、年相応のものでもあり、さし当たつて命には別状はないようだ。で、気持ちの方の検診をどうするかと考えた。気まぐれで始めた世田谷村日記は、自分でも驚く程に長続きしている。これはこれで自分の生活を客観化できて、私にとっては意味ある事なのだが、気持ちのより深いところにあるらしき、自分でもコントロールし難い部分、想像力、感性、飛躍力といった部分を検診することは出来難い。それで、絵を描いてみようと考えた。短期間で出来るだけ沢山描いてみようと思つた。フロイトやユングの夢判断じゃある

まいし、とも考えたが、私は無意識に手を動かしている事が少なくないから、悪い試みであるとも考えられなかった。現実の身体の方の検査を集中的に施す為に春に検査入院した。頭から、内蔵、心臓、筋肉、血液、尿その他徹底的にやられた。ほとんど恐怖に近い程の日々であつた。我ながら身体のいたみ等には弱い人間である。うたれる注射器の針の先を正視できない。銅版画の点数程は、その際に製作した。検査、検診の合い間を縫つて作つた。現実の身体を昼間、徹底的に探られ、その合い間と夜に行つた製作だつた。外部との連絡は一切切断つたから、まさに自分の身体と気持ちの中に降下してゆく旅のような作業だつた。病室で描かれたドローイングは展覧会には出展していない。銅版画の小品のほとんどが、閉じ込められた病室で作られた。何も自分を美化したり、演技したりする必要がほとんど無い状況だつた。だから、これらの銅版画はある種の自画像なのだ。身体の中へ、記憶の中へ、気持ちの中へと降りてゆく旅の風景が描かれている。そこに描かれた風景は荒地としか呼びよぶようのないものだつた。壮大な墓標、ピラミッド群、廢墟、竜巻き、洞穴、打ち捨てられた船のようなものが描かれている。荒涼とした風景である。少しばかり、じゃないか、大変なうぬぼれを自覚して言えば、ある種の神話的世界が描かれている様な気もした。それで、絵の題名を「登つても、登つても混沌」「荒地巡礼する眼玉之命」「眼玉内の地霊都市」等と名付けて遊んだ。そんな題名のような主題が先にあつたわけでは決していない。描かれたモノ、出現してしまつたモノに名を付けてみた、というのが本当のところなのだ。多分、この当りに渡辺豊和が反応したのだろうと予測する。彼が追い求めている神話的世界と共振したのだろうと思われる。これらの風景は砂漠と山の風景だろうと思われる。インナーヒマラヤの旅での記憶

シルクロードやアジアハイウェイの記憶、特にミャンマーのパガン遺跡との遭遇の記憶が浮いて出てきている。シシリアやギリシヤの記憶もあるのかも知れぬ。あれ等の遺跡群、すでに荒地とか言い様のない風景の中に、それでも確固として残存している数々のアイコンが描かれているのだろう。

近代社会はそれ以前の宗教的、神話的アイコンを破壊してきた。そして、結果として資本主義的アイコンを林立させた。資本主義的アイコンは身の廻りに数々の商品の形式で溢れ返っている。その代表の一つがNYのWTCであった。建築は凍れる音楽だと言つ例えがあつたが、超高層ビルは資本主義が、貨幣の力そのものが形になつたとも考えられる。そのアイコンがイスラムの原理主義によつて破壊された。現代は資本主義が作り続けている商品のアイコンが破壊されている時代でもあるようだ。別の言い方をすれば、資本主義的社会が自動的に創生しているニヒリズムの神話的状况とも呼ぶべきものさえも崩壊の兆しを見せ始めている。

十二時地下鉄銀座線外苑近くのコヒーシヨップでメモを記している。十三時に山下設計の橋本氏とときの忘れもので会う約束があつて、まだだいぶ間がある。先程、長男の雄大から八十五才になつた私の母の事で批判された。要するに早く一緒に世田谷村に住めるようにせよと言つ。八十五才の老人が安楽に暮らせる状態に早くしろと言つのだ。昨日、彼は母に会つたようで、足腰も弱くなつている。私だつて片時も頭を離れた事は無い事なので、早速母に電話して今週日曜日に会いに行く事にした。気の強い母で、独人の方が良いと言いはつてはいるが、それも限界なのだ。全く、自分の母親の事も満足に処せぬのに、二〇世紀のアイコンの崩壊もネエのだけれど、かと言つて、見栄や体裁でこんな事考えているわけでもないのだ。武蔵野市で八十五才の独人暮らしをし

ている私の母も現実ならば、私の制作した版画やドローイングもフワフワ浮いているだけのバーチャル世界ではなくつて、もう一つの現実であるのだけれど。こんな事、雄大に言つても、せせら笑うだけであるう。ときの忘れものにて、山下設計の橋本氏と会う。版画数点求めてくれた。近くのレストランで昼食。これから先の事等話し合う。十四時過修了。

十月二日

午前中喜多見現場。十四時前研究室。十五時三年生設計製図公開講評会。十九時前まで附合う。久し振りに設計の先生方にお目にかかる。イチローが大リーグの年間安打数記録を更新した。佐藤健はイチロー物語の著作作業を介して彼と友人になり、健の闘病生活に際しては、使用しているスパイクを送つてきたりしていた。足の大きさ、形状が全く同じだったらしい。病に負けず走れというメッセージだった。そんな事を思い出した。

十月三日 日曜日

毎日新聞の六車より電話あり。九日に展覧会会場で会おうという事になる。イチローの事、佐藤健の事などの話しになった。やはり。人間は仲々、死なぬものだ。昼間、武蔵野市の母のところに行く。夕方河野鉄骨の河野君来る。